慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	邦訳「国富論」題言
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.11 (1925. 11) ,p.1541(1)- 1587(47)
JaLC DOI	10.14991/001.19251101-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19251101-0001

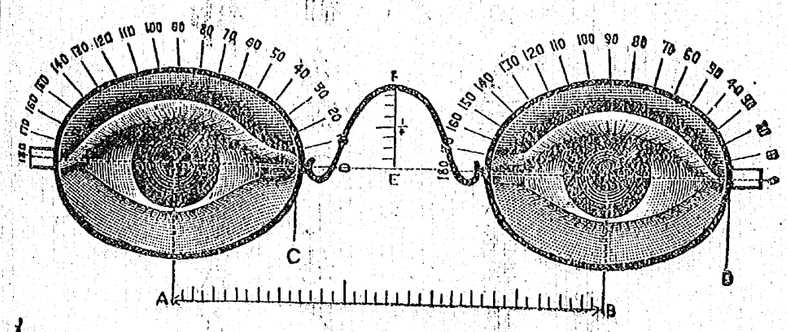
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

晩秋に品質良好の洋服を以て愈奮闘場裏に向ふ御用命の程は是非本店へ

芝三田通慶應義塾前
小林洋服店
電話高輪二九三三

各眼科處方調製



メニスカレンズ

芝三田通り松山病院前
秋元眼鏡店
電話高輪二〇四九番

フチナシ眼鏡

三田學會雜誌　第十九卷　第十一號

邦譯「國富論」題言

高橋誠一郎

一

國民の經濟生活の研究が一個の科學として存在するに至りしは比較的新たなる時代に屬す。古代希臘に於ては Xenophon の Economicus. 出でゝより屢々「經濟學」に就いて論ずる者ありしも、そは主として家事經營の實際的知識を包含するものなりき。Aristoteles の著として傳はれるものゝ中にも、同一題目の書のあるありて、經濟を分つて四種と做し、其の第三に「市府の經濟」即ち政治的經濟を擧げたるも、著者が是れに由つて意味する所のものは國家に對して收入を與ふるの術に外ならざりき。生産が主として下層階級の手に行はれつゝありし古代の世界に在りて

は、實際的思想は專ら社會の政治的方面に集中せられ、經濟的研究は單に政治的研究の從物として存在し、經濟問題に關する系統的論述存することなかりしなり。

羅馬帝國の滅亡、蠻民侵略の時代に於て殆んど消滅し去れる歐洲の交易が第十一世紀の頃よりして漸次回復し來れる時、先づ喚起せられたるものは、財貨は如何なる對價に對して賣却せらる可きや、其の交換價値を如何にして公正の原則と適合せしむ可きやの問題なりき。而して這般の問題を取扱へる中世の經濟學者は最早古代に於けるが如く、一般哲學者に非ずして、其の多くは神學者なりき。經濟學は爰に神學の一部として論述せらるゝに至れり。而して固より彼れ等の經濟理論は經濟的現象の間に通ずる因果關係の說明に非ずして、經濟的方面に於ける人間行爲の理想的指導を意味するものなりき。中世に於ける他の重要なる經濟理論、即ち徵利貸付に關するものゝ如きも亦た專ら這般の見地よりして論及せられたるものなり。

中世末に於て猶ほ人心を支配せるものは傳統と獨斷となりき。而も中世基督敎會の權威が其の頂點に達し、聖 Thomas の Summa Theologica. に於て包括的基督敎世界觀の完成を見たる第十三世紀の終末と共に、新たなる混亂と分離とは生じたり。彼の Nicole Oresme が其の De Origin, Nature, Jure et Mutationibus Monetarum. 中に採れる全然現世的にして且つ自然主義的なる方法は中世が將さに其の終末に近付かんとして、文藝復興期の曉光の差し初めたる象徵として見る可きものなり。Nicolo Machiavelli は傳統と絕緣して、社會科學に於ける Galileo の名を得たり。彼れは人民が其の在るが儘に思料せらる可きものにして、彼れ等に關する虛妄なる敎旨に從つて考察せらる可きものに非ざることを宣言せり。Francis Bacon は獨斷と迷信との桎梏より個人を解放するに努めたり。知は力を與ふ。社會的知識は人間の狀態を改善するの力を與へ、而して賢明なる社會的統制をして可能ならしむ。斯くて Bacon は個人的自由への道を開きたり。

マーカンチリストは猶ほ「學」を求めずして「術」を追へり。古代の「政治的經濟學」なる文字が第十七世紀に入りて近代的に甦り來れるの時は、即ち國家の收入が人民に依賴するの事實明かと爲れる時にして、爰に「政治的經濟學」は國民的發達により て人民を富强ならしむるの術と思惟せらるゝに至れり。而して資本的企業及び

國際的競爭の初期に在りて國家的保護の政策が國民的產業を發達せしむるの一手段として想定せられたるは固より當然のことなりしなり。而して私利をして公益の障害たらしむることなからしむるが爲めに、部分的利益の上に高く立つ單一なる權力をして之れを統制せしむるの必要も亦た社會の各方面に於て普く承認せられたり。

然るに全經濟生活の統制が新たなる社會的事情と調和することなきに至りたる時、立法者の閑却を許さゞる自然的秩序の存在は明瞭と爲る。爰にストア哲學の自然法學說は强烈なる勢を以て甦り來れり。佛國に於ては一部少數の哲學者は其の國家の窮狀に動されて、人類の社會的關係に於ても、一定の自然科學、永久不變の眞理たる原則の存在せざる可らざることを認め、彼れ等の國土を惱ましめつゝある大禍患の原因が這般の原則の侵害に在りと做すの思想に逢着せり。斯くてフィジオクラアトは創造の一般的計畫が萬有を支配するが爲めに自然の諸法則を設けたることを說き、人間と雖も此の法則に對して毫も例外たること能はざるものなりと做し、彼れは單に之れに遵ひ、之れを守りて、其の最大幸福に導く可き條件を知ることを必要とするものにして、人間社會に發生せる一切の凶禍は彼れ等が無智にして這般の法則に違反せるより生じたるものなりと論じたり。

軈がて又た經濟學は其の未だ曾つて遭遇することなかりし偉大なる進步の機緣に逢着せり。斯くの如きは即ち Adam Smith が其の大著 An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776. に於て成し遂げ得たる所のものなり。彼れの經濟哲學は英國に於ける啓蒙期の最も顯著にして且つ完成せる事業たりしなり。既述の如く古代より中世を通じて近世に至るまで、彼れ以前の理論は經濟生活に何等の獨立をも期待することなくして、直接に之れを宗教的、倫理的、政治的目的に從屬せしめつゝありしなり。そは又た之れを一全體に包括することなくして幾多個々の現象に分裂せしめつゝありしなり。彼れに至つて初めて國富が總べての重要なる社會的方面より論述せらるゝと同時に、吾人の全存在が物質的支持及び經濟的生活の觀察點より論述せらるゝに至れるなり。Smith に於て啓蒙の經濟理論は最も純正なる表現と系統的歸結とに到達せり。彼れは「自然的自由」に對する制限の撤廢を主張す。彼れは最も善く國富を增進するの徑路として自由

主義の採用を宣傳す。彼れの意見に從へば、國富の增進は各個人が何等の拘束をも受くることなくして自己の利益を追求するに由りて生ず可きものなり。而して個人的行動の自由が國家的制規に代りたるの時、在るが儘の經濟的事實の科學的研究は、不斷の干渉によつて其の希求する典型に從ひて事實を模塑せんとするの技術に代ることゝ爲るなり。

二

Wilhelm Hasbach は Untersuchungen über Adam Smith und die Entwicklung der Politischen Ökonomie, 1891. に於て Smith の哲學の種々なる部分と其の先輩との間に存する關係の系統を求めたり。彼れは哲學上に於ては Smith を以て Shaftesbury 及び Hartley の學徒なりと做し、而して又た Butler, Hutcheson 及び Hume との關係に於て彼れを解釋す。（Ibidem, I. i.）彼れは經濟學上に於ては Smith に及ぼせる Hugo Grotius, Pufendorf, Christian Wolff, Hutcheson 及びフィジオクラアトの影響を論ず。（Ibidem, II. i, ii.）Hasbach は尙ほ Smith 以前に於ける方法學及び方法上の三傾向を代表する者、即ち Descartes, Thomas Hobbes 及びフィジオクラアトの如き演繹法の代表者、Bacon, Hutcheson, Hume 及び Montesquieu の如き歸納法の代表者、並びに兩方法を結合せる James Steuart に對する Smith の關係を述べ、次いで Smith の方法學及び方法を論ず。（Ibidem, vi.）即ち彼れの先人は彼れの前に彼れの路を開きつゝありしと雖も、而も彼れは其の先輩によつて築かれたる基礎の上に莊嚴堅牢なる自己の事業を建設せるものなり。

Adam Smith の著作に就いて研究する者は殊に彼れの上に及ぼせる Francis Hutcheson の力强き感化を認めざるを得ず。著者の死後、一千七百五十五年に至つて出版せられたる Hutcheson の主著 A System of Moral Philosophy. の稿本は早く一千七百四十二年の交に成りしものにして、此の書は貿易の平衡、國家的制規及び人口の問題に關しては猶ほ幾分マーカンチリスト流の思想を有せざるに非ざるも、而も後年 Smith によつて其の「國富論」中に表明せられたる諸般の理論を預示する幾多の章句を包有するものなり。Hutcheson は一千七百二十九年より同四十六年に亙りて Glasgow 大學に於て倫理哲學の講座を擔任せり。Smith が Glasgow 在學時代に於て、彼れの講莚に列したるは僅かに十七才の時にして、此の少年の頭腦に燒付けた

る Hutcheson の深き印象は長く消ゆることなかりき。Hutcheson は一千七百四十五年羅典語を以て Philosophiae moralis institutio compendiaria libris III. (thices et iurisprudentiae naturalis elementa continens. と題する小篇を公にせり。而して此の著の飜譯は彼れの承認を經て、同四十七年 A Short Introduction to Moral Philosophy in three books, containing the Elements of Ethicks and the Law of Nature. の題下に出版せられたるが、此の著の序文に充てられたる「大學生に與ふ」るの書は凡そ下の如き文字を以て始まる。曰く

「古代人の間に於ける著明なる哲學の分類は合理哲學又たは論理哲學、自然哲學及び倫理哲學と做すにあり。彼れ等の倫理哲學は分たれて、德の本質を敎へ、且つ心內の傾向を制規する更らに嚴密なる意義に於ける倫理學及び自然法の知識を包有す。後者は(一)私權の敎義、即ち自然的自由を收得する法規(二)經濟學、即ち家族各員の法規及び權利、並びに內治の諸計畫及び國家相互の權利を明かにする政治學を包含す」

と。斯くて其の著は第一編「倫理學要論」第二編「自然法要論」(羅典文は Jurisprudentia privata)及び第三編「經濟學及び政治學原理」と題せらる。Smith の講義中に在りて最後に「道德的情操論」に發達するに至れるものは、明かに此の Hutcheson の著の第一編に相當するものなり。Smith の Glasgow 大學に於ける法學講義中、其の第一部「正義」の第三項「私權」は本書の第二編に相當し、而して其の第一及び第二部たる「公法學及び家內法」は其の第三編に相當するものなり。加之ならず、Hutcheson は其の著の第二編第十二章に於て「財貨の價値及び價格に就いて」と題して些かながら價格の構成原因及び良貨の特性を論じたり。恐らく「國富論」の萠芽は本章中に於て看出し得可きものなる可し。(Edwin Cannan, Introduction to Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith reported by a student in 1763, 1896, p. xxvi.)。

更らに Hutcheson の前揭「倫理哲學體系」を取りて觀るに、其の價値に關する意見の如きは宛ら人をして使用價値及び交換價値に關する Smith の著名なる章句の草稿を讀むの感あらしむるものあり。(cf., System, op. cit., vol. II. p. 53 ff.)。Hutcheson は Smith と等しく勞働が富の大泉源にして又た價値の眞尺度たるを主張するものにして、而して總べての人は公共の利益が別個の行爲を要求す可き場合を除き、個人の身體又たは財產に對して毫も危害を加ふることなき以上、如何なる仕事、又たは娛樂に於ても、自己の目的の爲めに自己の欲する所に從つて其の能力を使用す

るの自然權を有する旨を宣言せるが如きは、(ibid., vol. I. pp. 319-321.)、人をして漫ろに「各人が自己の勞働に對して有する所有權は自餘一切の所有權の本源的基礎たると等しく、又た最も神聖にして犯す可らざるものなり。貧民の相續財産は其の双手の力と技能とに存す。而して彼れを妨げて、其の隣人に危害を及ぼすことなくして、其の適當と思惟せる方法を以て這個の力と技能とを使用せしめざるは明かに此の最も神聖なる所有權を侵犯するものなり」と論じる Smith の所言を想起せしむるものあるなり。(Wealth of Nations, Bk. I. chap. x. pt. 2)。Hutcheson の學說は本質的に Adam Smith の名と同一視せられつゝある經濟的自由の學說なりき。

三

吾人は Hutcheson の影響が Adam Smith を自由主義に導くに與つて力ありし事を認むるも、而も彼れが自利心を以て經濟行爲の出發點と爲せるの點に於ては彼れに對する Hutcheson の感化を認むることを得ず。Smith は Hutcheson の講義に出席してより二十年の後、其の師が自愛を輕視すること甚しきに過ぐるを理由として特に彼れを批難せり。Smith は其の「道德的情操論」中に於て Hutcheson が仁愛(benevolence)を以て凡ゆる行爲に對して德の性質を賦與し得る唯一の動機なりと做し、最も仁慈なる行爲は人民の最大多數の福利を目的とせるものにして、自愛(self-love)は個人をして自個の幸福を注意せしむるの外、他に何等の效果をも有することなき場合には無害なるも、而も如何なる度位に於ても、亦た如何なる方向に於ても斷じて有德なる行爲の動機たること能はざるものなりと觀、自是(self-approbation)の快樂を顧慮することすら仁愛的行爲の功德を減少する旨を叙せり。(Hutcheson, Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, 1720, sect. ii. art. 4; Smith, The Theory of Moral Sentiments, Pt. VII. sect. ii. ch. 3.)。而して Smith 曰く、

「吾人自身の私的幸福及び利益に對する注意も亦た幾多の場合に於て頗る稱揚す可き行爲の原則たるの觀あり。經濟、勤勉、愼重、注意、及び著意の習慣は一般に自利的動機より養成せられたるものと想像せられ、同時に又た萬人の尊敬及び稱揚に値する頗る殊勝なる性質なりと思惟せらる。洵に利己的動機の混入は往々にして仁愛的感情より生ず可き行爲の美を汚辱するの觀あり。然れども其の原因は自愛が斷じて有德なる行爲の動機たると能はざるが爲めに非ずして、仁愛的原則が此の特殊の場合に於ては其の相當なる强度を缺き、而して全然其の目的に不適當なるの觀あるに存するなり。」

「是非鑑裁家(casuits)は屢々人間行爲の是非を決定するの標準を之れが社會の安寧若しくは不秩序に及ぼす影響に置くと雖も、社會の安寧福利に對する注意のみを以て行爲に取りて唯一の有德なる動機たらしむ可きものに非ずして、單に、凡ゆる競合に在つてそは諸他の動機に對して平衡を與ふ可きものと爲るに過ぎず。」「恐らく仁愛は神に在つてりては行爲の唯一原則たる可し。」「然れども神に關する場合は如何にあり得るとも、人間の如き不完全なる被造物にして其の存在を維持するが爲めに自己以外の物件を要求すること極めて多きものは、往々にして諸他の動機より行動せざるを得ざるなり。」と(Moral Sentiments, op. cit.)

今日に於てはSmithの上に及ぼせるBernard de Mandevilleの影響がJohn Ramsay McCullochのLiterature of Political Economy, 1845. よりEdwin Cannanの研究を經て一般に承認せらるゝ所と爲れり。(Cannan, Introduction to "The Wealth of Nations," vol. I, 1904, pp. xliii-xlvi.)。MandevilleのThe Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits. の基礎を成せる拙惡なる英詩The Grumbling Hive: or, Knaves turn'd Honest. は一千七百〇五年價格六ペニーの小冊子として發賣せられたるものなり。彼れの寓話中に描き出されたる蜜蜂は、彼れ等が奢侈と不德との裡に生活しつゝありし間は、其の小國家は繁榮を持續せるも、是れ等の兩者が美德と質素とに道を讓るや、彼れ等は直ちに其の一切の幸運を失ひて「滿足と敦厚とに加護せらつゝ空木中に飛び入るなり」。(Fable, vol. I. 4th. ed., 1725, p. 22.)。Adam Smithは其の「道德的情操論」に於て辛辣にMandevilleを論評し、此の著者の意見は殆んど總べての點に於て不當なるに拘らず、人間の本性中に幾分の示現を見るものと做せり。(Smith, op. cit., Pk. VII. sect. ii. chap. 4.)。Smithが其の學說を分勞より出發せしめ、而して其の起源を人間本性の傾向に求め、人間が常に其の同胞の助力を必要とするを說き、而して彼れは惟り彼れ等の仁愛のみに依つて之れを期待すること能はざるが故に、彼れ等が自己の利益を顧慮するの念に訴へて之れを得んとするを論じたるは正さにMandevilleより得たる所のものなり。(cf., Wealth of Nations, Bk. I. chap. ii; Fable of Bees, pt. ii, 1728, p. 421.)。

四

凡そ中世を通じて自利的衝動及び私益心は不德有害なる動念と認められたり。然るにマーカンチリズムの時代に入るに及び、國民の自利心を指導して之れを最も賢明なる方向に進ましめんとするは實に當時に於ける爲政家の主たる努力にして、凡そ一千五百四十九年の交に成れるJohn Halesの對話篇A Discourse of the Com-

mon Weal of this Realm of England. 中に夙に預示せられ(ibid., ed. E. Lamond, 1893, pp. 59, 51, 121.)、第十七世紀の大半を通じて社會の各方面に多大なる影響を及ぼせる所のものなり。マーカンチリズムの期する所は中央政府の手に行はれたる奬勵若しくは制限に由り私的及び部分的利益をして國民的強大及び獨立を助成す可き共同の利益と一致せしむるに存す。吾人は既に第十七世紀の初年に於て自然法學說上よりして「自由貿易」を主張し、マーチャント・アドヴェンチュラース會社の獨占的傾向を非難し、彼れ等の獨占を以て英國民の自然的權利及び自然的自由に反するものと看做すの論ありしことを知る、而も當時に於ける遠洋貿易の本質と外國人との競爭とは終に獨占會社をして勝利を贏得せしめたるなり。

然るに貿易の發達と共に會社外の商人は其の數を增加し、其の勢力を增大し來れり。而して商事會社の排他的特權が違例たるの事實は闡明せられたり。一千六百二十五年の獨占條例は貿易の自由に向つて一歩を進めたるものにして、何人と雖も私的利益の爲めに全英國民平等の權利に屬するものを獨占す可きに非ずと做すの原則は爰に確立せられたり。而して同條例は貿易統制に關する國王の大權を制限せり。東印度會社は一千六百九十一年より一千七百〇二年に至るの間に於て國民的基礎の上に改造せられたり。大體に就いて云へば、第十七世紀の特色たりし獨占的勅許會社の手中に存したる貿易は今や自由なる私企業に道を讓るに至れるなり、斯くの如き變化が英國に於て最も完全に行はれたるの事實は亦た同國をして第十八世紀を通じて歐洲諸商業國間に伍して優勝の地位を占むるに至らしめたる主因として認めらる可きものなり。而してマーカンチリズムの信仰は既に第十七世紀後半より動搖を感ずるに至りつゝありしなり。

由來マーカンチリストは一方に於て貨幣供給の重要なる所以を力說すると共に、中世流の舊方法、即ち直接行動を以て貴金屬の移動を抑制し、强力を以て其の輸出を停止し、其の輸入を誘導せんとするの有害無效なることを善く意識せり。固より彼れ等と雖も尙ほ金銀財寶の增加を要望す。而もそは各個の取引に於て有利なる差額を確保せしむ可く爲替歩合を人爲的に上下するよりも、寧ろ貨物の輸入に對する輸出超過に由りて地金を以て支拂はる可き貿易の差額を生ぜしむるに依りて最も克く確保し得可きものと見たり。Thomas Mun は貨幣の國外輸出を

以て絶對に自國の財寶を喪失する所以なりと做す俗衆に對して、通商上自國貨幣を輸出するは其の財寶を增大するの一手段に外ならざるの理由を論證するに努力せり。（England's Treasure by Forraign Trade, or, The Ballance of our Forraign Trade is the Rule of our Treasure, 1664, pp. 34-50.）。即ち先づ金銀輸出の點に關し、國家は果して商人をして其の任意に行動せしむるに由つて利益を受くるや否やの問題は軈がて一般的性質を帶ぶるに至り、時代の思潮を經濟的自由主義の方向に導かんとしつゝありしなり。

而して英國に於けるマーカンチリズムの倒壞は一部の貿易平衡論者によつて表明せられたる極端なる悲觀論ありしにも拘らず、第十八世紀を通じて繁榮を持續せる英國貿易の實情によりて其の勢を促進せられたり。當時のホイッグ黨は一方に於て總べて自國の工業と競爭するの觀ある貿易を禁止すると共に、他方に於て自國工業に對し有利なる影響を有するものは出來得る限り之れを發達せしめざる可らずと做し、而して有害なる貿易を立證するが爲めに貿易の差額によつて與へられたる指標に依賴せり。之れに對してトーリー黨に屬する論者は特殊國に對する貿易の差額よりも一般貿易の差額を重視し、兩者の間に激しき論爭を生じたるが、此の一般貿易の平衡を主張するの論こそは軈がて自由貿易論を生むの楷梯と爲れるものなれ。

而して當時の一般論者が最も曖昧なる計算のみに據つて議論を立て、彼の急速なる國富減退の豫言の如きも唯だ單なる風聞に基けるもの多かりき。洵に正確なる報告の蒐集は當時に於ける最大なる必要たりしなり。斯くて出來得る限り正確なる統計の蒐集に力を注げる者の中に Sir William Petty あり。彼れは人間の勤勉及び自然の資源を以て社會の物質的進歩に對する二個の主要なる要素を觀たり。（A Treatise of Taxes & Contributions, 1662, p. 49）。固より勞働及び土地を以て國富の父母と做すの意見は彼れを以て始まるものに非ず。彼れの創見は此の觀念の案出に非ずして、寧ろ之れに對する「政治算術」（統計）の適用に存するものなり。彼れは經濟上の目的の爲めには土地及び其の所產並びに貨幣、勞銀及び人口に關する徹底せる調査を以て第一に必要なるものと看做したり。（ibid., p. 34.）。次いで當時の大哲學者 John Locke は Some Considerations of the Consequences of the Lowering of

Interest, and Raising the Value of Money, 1691. 其の他の著に於て其の國民の經濟生活の一端を取つて liberal study の對境たらしめたり。更らに「英國の生める最大なる哲學者」David Hume に至りては輸出入の推移に對して、貨幣定量說の適用を行ひ、英國の正貨にして流出せんか、物價は下落し、輸出は增加し、輸入は減少し、爲替は英國に取つて有利なる方向に轉じ、斯くて正貨は流入するに至る可く、反對の事情は又た反對の結果を生ずるに至る可きを指摘せり。(Political Discourses, 1752, Essay v.)。

五

Hume は「凡ゆる科學、殊に精神科學は人間性に對して一定の關係に於て立つものなり」(A Treatise of Human Nature: being an Attempt to introduce the experimental Method of Reasoning into Moral Subjects, 1738, vol. I, Introduction.) と做せる命題より出發して、其の悟性に關する考察を開始し、而して是れよりして凡ゆる人知の基礎は人間性の研究に由りて發見せらる可きものなりとの論斷を導けり。而も這般の研究は、既に物理學の方面に使用せられて好結果を擧げ、而して Bacon, Locke 及び Shaftesbury に由りて人間性に對する適用を開始せられたる、實驗的方法に由りて遂行せられざる可らず。彼れは自己を以て經驗科學としての人性學の創始者なりと信じたり。(ibid., Bk. I. pt. iv. sect. 7.)。斯くて「人間の科學」(science of man) の創設を企圖したる Hume は又た經濟科學の可能性を信じ、其の Political Discourses, 1752. 中に於て政治家的見地よりして「商業」「技術の精練(奢侈)」「貨幣」「利子」「貿易差額」「貿易上の嫉視」「租稅」及び「公信用」等の主題を論述せりと雖も、而も終に「經濟學」の名辭を用ふることなくして止めり。Hume は實に經濟學が政治哲學より發生せんとするに際し、猶ほ其の過渡の階段を代表せる者なり。而も是れ等斷片的なる諸論文中には尙ほ一貫せる思想の脈絡のあるありて、或る意味に於ては經濟學の體系を構成するものとも稱するを得可し。Smith は先輩として又た友人として Hume よりして多大なる影響を受けたり。而して Smith も亦た恒久不變なる人間性を以て其の社會哲學の根本原理と觀たり。曰く、

「科學及び總べて悟性の確固たる判斷の對象は永續、不變、常住にして發生、敗壞其の他如何なる種類の改變をも受くるの虞れなきものたらざる可らず。斯ぐの如きは事物の特性 (species) 即ち特殊の本質なり。人間は絕えず其の身體の凡ゆる微粒子を變換しつゝあり、而して其の心意の凡ゆる思想は間斷なく變化し連續しつゝあるなり。然れ

ども人性即ち人間の本性は常に存在し、恒に同一にして決して發生し又た敗壞するとなし。是れに由りて、そは科學、理性及び悟性の目的物たると、人間が諸覺官、及び覺官の上に基礎を有する不定なる意見の對象たるが如し。覺官の對象は感覺の作用より獨立せる外部的存在を有するものと解釋せらるゝ所なるが、是れ等悟性の目的物は之れにも增して悟性の作用より獨立せる外部的存在を有するものと想定せらるゝなり」ゝ。（Essays on Philosophictal Subjects, by the late Adam Smith, LL. D. Fellow of the Royal Societies of London and Edinburgh, 1795. p. 119）。

六

Smithは早く既に一千七百五十年の交に於て(一)一國の富は其の金銀より成るに非ずして、其の消費し得可き貨物の高より成ること、及び(二)之れを增加す可き眞の方法は特權を授與し、制限を課するに存せずして、其の生產者に好個の機會を保證して何等の恩惠をも賦與せざるに在ることを說けり。

Smith は牛津大學在學六ヶ年にして一千七百四十六年八月を以て蘇國に歸りてより同四十八年秋に至る滿二ヶ年間は何等正規の業務に就くことなく、唯だ其の好む所の研究に耽りながら、母と共に鄕里に留まりしが、一千七百四十八年の後期に至り、Edinburgh に其の居をトし、Kames 卿、即ち當年の Henry Home 氏の勸奬に由り、同學年及び次ぎの二學年を通じて修辭學及び美文學の講義を行ひ、尙ほ少くとも一千七百五十年より同五十一年に亙れる冬期に於て經濟學に關する講義を行へり。此の講義の案文は一千七百四十九年に筆錄せしめたるものにして、彼れは其の中に於て交易自由の學說を主張せり。彼れは此の事實を一千七百五十五年 Glasgow の某學會に於ける講演草稿中に自ら記しつゝあるなり。（Dugald Stewart, Account of the Life and Writings of Adam Smith LL. D., from the Transactions of the Royal Society of Edinburgh, read January 21, and March 18, 1793, in the "Collected Works of Dugald Stewart, Esq., F. R. SS," ed. by Sir William Hamilton, vol. x, 1877, p. 68.）。

當時彼れの思想に有力なる影響を及ぼしつゝありしものに James Oswald あり。彼れは Smith に比して八才の長者にして、後年商務及び拓殖事務官、大藏參事官、並びに愛蘭大藏次官と爲り、一千七百六十八年五十二才の壯齡を以て逝ける人なり。Smith が Oswald に傾倒せるゝは Hume に讓らざりき。（Memorials of the Public Life and Character of the Right Hon. James Oswald of Dunikier, 1825, Preface; Stewart, op. cit., p.

81.)。Hume は早く一千七百五十年、其の有名なる「貿易平衡」論(同五十二年に至り前掲 Political Essays. 中に公にせられたるもの)の稿本を Oswald に送りて其の意見を徵せり。Oswald は十月十日 Caldwell Papers に掲げたる長文の書簡中に於て之れに答へたり。(i. 93.)。彼れは其の物産及び貨幣を空竭せしめらる可しと做す諸國民間に於ける嫉妬が全然不合理たる可きことを宣言し、斯くの如き事實は人民と産業の殘存する限り決して生起することなく、貨物及び貨幣の輸出禁止は常に其の所期に正反對の結果を生じたることを主張せり。即ちそは國内の耕作を增加せずして却つて之れを減少し、而して物産の輸出を防止すること愈々大なれば、貨幣を國外に驅逐すること愈々大なりと做せり。

七

Smith が Glasgow 大學教授として行へる講義は彼れが自ら「道德的情操論」及び「國富論」中に公表せる部分を除きては Edwin Cannan が偶然の機會よりして其の法學講義筆記を發見するに至るまでは全く吾人に傳存する所なきものと想像せられ、吾人は唯だ僅かに彼れの最も愛せる門下の一人たりし John Millar の談る所に據りて其の要旨を知ることを得たるに過ぎざりき。彼れは先づ Smith の論理學講義に就いて云々し、彼れが其の時間の多くを擧げて修辭學及び美文學の體系を講述せるとを述べて後、其の精神哲學の體系に就きて左の如くに說きつゝあるなり。

「Smith は彼れが論理學の教授に任命せられてより凡そ一ヶ年の後、精神科學の講座に選任せられたり。此の問題に關する彼れが講義の課程は四部に分割せられたり。第一は「自然神學」を包有し、彼れは爰に神の存在及び屬性の諸證左並びに宗教の基礎を成せる人間心意の諸原理を考察せり。第二は嚴密なる意義に於ける「倫理學」を包含し、主として彼れが後に至つて其の「道德的情操論」中に公にせる諸學說より成る。第三部に於て彼れは「正義」に關し、又た精緻にして正確なる法則を收受し得可きが故に是れに由りて詳密精細なる說明を行ひ得可き底の道義の部門を更らに巨細に論述せり」。

「此の問題に關し彼れは Montesquieu により て暗示せられたるの觀ある計畫に從ひ、最も粗野なる時代より最も精練せられたる時代に至るまで、公私兩法律思想の漸次進步し來りたる跡を探求し、生存及び財産の集積に資する諸技術が之れに相應せゝ法律及び統治の改正若しくは變更を生ずるの效果を指摘するに努めたり。彼れは其の力作の此の重要なる部門をも亦た社會に發表せんことを期したるも、而も彼れは終に「道德的情操論」の結末に誌されたる這般の意向を遂行することなくして逝けり。」

「彼れは其の講義の最後の部分に於て「正義」の原則に基礎を有することなく、「便宜 (ex-

pediency)」の其れに基き、而して一國家の富と力を繁榮とを增進するものと思料せらるゝ政治的制規を考査せり。這般の見地の下に彼れは商業、財政、宗教的及び軍事的施設に關する政治上の諸制度を考察せり。彼れが是れ等の諸問題に就きて講述せる所のものは彼れが後に至つて「諸國民の富の本質及び原因の研究」なる題下に公にせる著述の要旨を含蓄するなり」。

Smithは法學及び政治學に關する講義に於て最初よりして自由交易の學說を唱道せり。而して彼れは其の Glasgow 在住の十三ヶ年間に於て事實上同市をして彼れの意見に改宗せしめ得たりと稱せらる。當時 Clyde の最も有名なる一商人たりし James Ritchie なる人、曾つて Dugald Stewart に談りて曰く、Smithは其の Glasgow 在職中に於て同地の主要なる人々の多數を說服して自由交易主義に改宗せしめたりと。(Stewart, Works, vol. VI. p. 379.)。マーカンチリストの殿將 Sir James Steuart は最も巧妙なる辯論家にして、Smithは彼れの諸著よりも寧ろ其の談話によりて善く彼れの主張を了解せりと云へる程なりしが（Dr. Cleland's Account of Glasgow in New Statistical Account of Scotland, vi. p. 139.)、彼れが一千七百六十三年其の長き大陸の流寓より歸りて後、其の周圍を化して保護主義を信奉せしめんことを努めたりと雖も、彼れ等は既に Smith の所說によりて全然穀物輸入の自由の信者と爲れる後なりしを以て、彼れは是れ等「Glasgow の理論家」に對して保護論を反復するに倦める旨を率直に告白せり。(ibid., p. 378.)。

加之ならず、Dugald Stewart は一千七百五十二年乃至三年に Glasgow 大學に於て倫理哲學の講義を聽講せる人々の談に徵して、Smith が早く既に當時の講義中に於て「國富論」の根本原理を表明し、而して同五十五年、同市の某學會に於て、其の自然的自由の學說を表明せる旨を記せり。此の講演の草稿は後年 Stewart の所藏に歸せるものにして、Smithは死に先立ちて、其の友人 Dr. Joseph Black 及び Dr. James Hutton をして出版の價値ある少數のものを除き、爾餘一切の草案を焚かしめたるも、惟り此の草稿のみは如何にしてか、Stewart の手中に存したるが爲めに、火中に投ぜらるゝを免れたるなり、然れども、此の草稿も亦た恐らくは Stewart の意志に基き其の子によりて破毀せられたるものなる可し。何となれば Stewart は草稿の全部を公表するは、永遠に葬り去るに如かざる個人的の不和を復活せしむるの虞あるが故に、其の公表を不穩當と思惟せるを以てなり。從つて其の內容に關する吾人

の知識は Stewart が初期に於ける Smith の政治思想の發達を示す貴重なる資料として引用したる左の數行の文字に限られたり。而も Stewart は「國富論」中に於ける最も重要なる意見の多くが此の文書中に詳說せられつゝある旨を述べつゝあるなり。

「人間は一般に政治家及び設計家によりて一種の政治的技工の材料として思料せらる。設計家は自然が人事の上に作用する進路を攪亂す、而して自然をして彼れ自身の計畫を設定せしむるが爲めには之れを放任して、其の目的の追求上公正なる取扱を與ふる以上に何物をも必要とすることなし。……一國をして最低の野蠻狀態より最高度の富裕に導くが爲めには平和と輕易なる租稅と而して苛酷ならざる司法以外に殆んど何物をも必要とすることなし。即ち爾餘一切のものは事物の自然的經過により て成就せらるゝが故なり。此の自然的經過を阻害し、事物をして强ひて他の水路に就かしめ、若しくは特殊の點に於て社會の進步を停止せんと努むる一切の政治は不自然にして、其の存續の爲めには勢ひ壓制暴虐たらざるを得ず。……此の論稿中に宣明せられたる意見の大部分は余が猶ほ余の手元に所藏、而して六年以前に余の事務を辭せる一書記の手に草せられたる講演中に於て仔細に論述せられたり。是れ等のしは、其の全部を擧げて余が Glasgow に於て過したる最初の冬、初めて Craigie 氏の學級を敎授してより以來、今日に至るまで何等重要なる變更を加ふることなくして行ひ來れる余が講義の題目たりしなり。是れ等のものは其の全部を擧げて余が Edinburgh を去る前の冬、同地に於て則讀せる講演の題目たりしものなり、而して余は Edinburgh 及び Glasgow の兩地より是れ等のものが全然余の有に屬することを確證す可き無數の證人を擧ぐるを得るなり」。（Stewart, Works, vol. X. p. 68; Alexander Carlyle, Autobiography, 1860, 285.）。（此の論稿が如何なる事情に基きて起草せられたるか、其の詳細は今よりして推知することを能はず。唯だ Stewart の言より推して、Smith の講義に出席し、又は其の交友と屢々往來して Smith の思想を把握せる者が之れを自己のものとして公にしたるか、若しくは公にせんとしつゝありしを知るを得可し）。

八

然るに全然世に傳はることなきに至れるものと想像せられたる Smith の講義の一部にして法律學に關する部分は偶然の機會よりして其の筆記錄を發見せらるゝに至れり。即ち Edwin Cannan 氏が一千八百九十五年四月二十一日 Oxford Magagine の學藝記者と對談し、談偶々 Adam Smith に及べる時、恰も居合せたる初對面の辯護士 Charles C. Maconochie 氏より彼れが Smith の法律學講義の筆錄を所藏せる旨を聞知し、翌九十六年、之れに長文の緒言と嚴密なる脚註とを加へて出版するに至れる

Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith reported by a student in 1763 and edited with an introduction and note by Edwin Cannan, 1896. 是れなり。（cf., ibid., pp. xi-xxi.）

吾人は此の講義によつて、彼れの法學は「道德的情操論」と「國富論」との內に表明せられたる敎旨を結合するものなることを知る。直ちに「道德的情操論」の末章に接合する本講義は啻だに公私の權利を論ずるのみならず、最後に police をも亦た取扱ひつゝあるを觀る。爰に謂ゆる police は實に「經濟學」の名稱の下に「國富論」中に論述せらるゝに至りたる所のものなり。吾人は此の部門中に人間の經濟行爲が其の根柢を自愛衝動中に有すと做すの叙述に遭遇す。（Lectures, op. cit., p. 169.）斯く言へばとて Smith は斷じて如何なる行爲と雖も仁愛によつて喚起せらるゝことなきを主張せんとするに非ずして、唯だ仁愛的行爲は經濟行爲以外の範疇に屬することを說くに過ぎず。是れ等の兩者は共に人間に取つて特有にして必要なるものなり。斯くの如き意見は又た明確に「道德的情操論」の諸章句中に表明せらるゝ所なり。（cf., ibid., Pt. VI. sect. iii, Conclusion; Pt. VII. sect. ii. chaps. iii, iv.）。

彼れは先づ其の講義を始むるに當つて學生に告げて曰く

「法律の四大目的は正義、行政、收入及び軍備なり。正義の目的は不正行爲に對する保證にして、そは民法の基礎たり。行政の目的は貨物の低廉、公安及び淸潔なり（若し此の最後の兩者が此の種の講義に取りて餘りに些々たるものに非ずとせば）。吾人は此の項目の下に一國の富裕を考察す可し。其の時間と勞働とを國務に捧ぐる長官が之れに對して報償せらることも亦た等しく必要なり。此の目的の爲めに、又た統治の諸經費を支出するが爲めに一定の基金は調達せられざる可らず。收入の起源爰に存す。此の項目の下に於ける考察の主題は種々なる課稅によりて人民の支拂はざるを得ざる收入徵收の適當なる方法なる可し。（中略）。政府が外國の非行及び攻擊に對して自己を防衛し得るに非ざれば、最良の行政も安固を與ふること能はざるが故に、法律によつて備へらるゝ第四の事項は這般の目的に對するものなり。而して此の項目の下に於ては種々なる軍備と其の長所及び短所、常備軍、國民軍等の組織を明かにす可し。是れ等を論じたる後に、國際法を考察す可し」。

と。（ibid., pp. 1, 3.）。而して「行政」の下に「低廉及び夥多」を配置せるは恐らく多くの經濟學上の資料を法律に關する講義中に誘入するを是認するが爲めに彼れの想到せる後思案なりしなる可し。（Cannan, Introduction to Wealth of Nations, p. xxxiv.）。

蓋し Smith は一千七百五十一年一月七日を以て其の前年 Loudon の逝去に由り

て空虛と爲れる Glasgow 大學論理學講座に選任せられ、同十六日就任式を了し、Edinburgh に於ける講義の完了を俟つて、同年十月の新學期より開講し、更らに同大學に於て倫理哲學の講座を擔任せる Francis Hutcheson の直接後繼者 Thomas Craigie 氏病氣休講の爲め、其の代講を行ひ、次いで同年十一月二十七日を以て Craigie 氏は長逝せるが爲め、翌五十二年四月二十九日、其の後繼者に任命せられたり。斯くて彼れは其の就任の當時に於て一方に論理學講座を擔任すると共に、他方に於て倫理哲學の代講を行はざるを得ざりしが爲に、疑ひもなく彼れは其の Edinburgh に於て行へる講義の資料を利用するに由りて少なからず其の二重の負擔を輕減せんとせるなる可し。即ち彼れが是れより先き一千七百四十八年の冬期より Edinburgh に於て修辭學及び美文學の講義を行ひ、尙ほ少くとも一千七百五十年より同五十一年に亙れる冬期に於て經濟學に關する講義を行へることは前述の如くなるが故なり。當時蘇國の諸大學に於ける課目の傳統的分配に據れば、論理學の講座は修辭學及び美文學を抱擁し、精神哲學は法律學及び政治學を包含せるが故に Smith は曩きに講述せる所を採つて Glasgow に於ける講演を塡充せるなり。(Dugald Stewart, Works, op. cit., vol. x, 1877, p. 11. 所載 John Millar の所言、並びに Thomson and Craigie, Life of William Cullen, vol. I, 1832, p. 605. 所載一千七百五十一年九月三日醫家 Cullen 宛 Smith の書翰參照)。

Smith は其の倫理哲學の講義に於ては略々 Aristoteles より傳承せるスコラ哲學の傳統を遵守して變らざりき。然れども Smith は特に一の點に於て Aristoteles より分離せり。蓋し Aristoteles は「經濟學」なる文字によりて家事經營の實際的學問又たは技術を意味したるに對し、Smith は經濟學に定義して「人民及び主權者の兩者を富裕ならしむることを提唱」するものと做せること是れなり。(Wealth of Nations, Bk. IV. Introduction.)。即ち前者が專ら家計的見地より經濟を論じたるに反し、後者は主として國民的意義に於て之れを取扱へるの相違あるなり。斯くて又た經濟學は彼れに取りては政治學に渡す橋梁に非ずして、却つて政治學は倫理學と經濟學との間に於ける調停者たるの點に於て、彼れは Aristoteles 以來の傳統より分離するに至れるなり。從つて Smith は其の講義に於て先づ第一に自然神學を論じ、次いで一般に稱讃せらる可き行爲の本質に關する研究、即ち、倫理學に及びたる

後、直ちに正義に關する倫理の部門、即ち法律及び政治哲學に對する攻究を行ひ、而して最後に正義の原則に基礎を有することなくして、便宜の其れに依賴し、一國家の富と力と繁榮とを增進するものと思料せられたる政治的制規を檢討せるなり。此の講義中に試みられたる計畫は後に至つて上梓せられたる著作中に於ても亦た追隨せられたり。Smith が當初の意向は「道德的情操論」中に於て公にせらるゝに至りたる倫理學に次いで、法律及び統治の一般原理、及び啻だに正義のみならず、police（此の名稱は佛語に出て、素と希臘語の *πολιτεία* に發し、本來民政の道を意味せるものなりしも、Smith の當時に於ては單に政治の比較的重要ならざる部分の制規、即ち清潔、安穩及び低廉若しくは豐富を意味するものと爲れり — Lectures, op. cit., p. 154）收入及び軍事並びに其の他總べて法律の對象たるものに在つて是れ等のものが社會の種々なる時代及び時期に於て遭遇せる種々なる變革を叙述せんとするに在りしなり。（The Theory of Moral Sentiments, Pt. VII. sect. iv.）。然るに彼れは斯くの如き最初の計畫を變更し、Millar が彼れの講義の第四部を構成するものと做せる部分にして、前揭「正義、ポリス、歳入及び軍事に關する講義」中の第二、第三及び第四部を構成するものを先づ大成して公にせるなり。斯くて Smith は一千七百九十年に出版せられたる其の「道德情操論」第六版の序文に於て、彼れが一千七百五十九年の第一版以來同書卷末の章句中に說ける前揭別著の豫約を、其の「國富論」によりて、少くともポリス、歳入及び軍事に關する範圍內に於ては半ば履行せる旨を物語りつゝあるなり。是れに據つて觀れば、「講義筆記」中の第二、第三及び第四部は實に「國富論」の第一草案として役立てるものなり。而して Millar の謂ゆる Smith の倫理哲學を構成する第三部にして、「講義筆記」の第一部に相當する部分、即ち彼れの體系中に在りて倫理と經濟とを調停する部分は終に彼れ自身の手によりて一般讀書界に呈示せらるゝことなかりしなり。而も彼れは其の「國富論」第五編に於て法律及び政治哲學に屬する若干の問題に論入せり。

九

Smith が教授としての名聲は年と共に次第に高まり行き、多數の學生は偏へに彼れ在るが故に、遠隔の地方より Glasgow に來り、彼れの教授せる科學の部門は Glasgow の流行と爲り、彼れの意見は諸倶樂部及び諸學會に於ける主たる論題と爲り、彼れ

の發音又たは話說の態度の些細なる特色すら屢々模倣せられ、漆喰製の其の胸像は書肆の店頭を飾るに至れり。而して Smith は一千七百五十九年、即ち彼れが Glasgow 大學教授に任命せられより九年の後に至つて初めて其の二大偉著の一を完成せり。The Theory of Moral Sentiments. 是れなり。一の著作なくして既に其の名聲を蘇國に馳せたる彼れは此の書の上梓と共に當代第一流の作家中に伍するの世界的承認を受けたり。然るに此の書を讀みて痛く感動せる者の一人に Charles Townshend あり。Smith は彼れの推擧に由り、其の夫人 Dalkeith 伯爵夫人の長子なる若き Buccleugh 公爵の旅行附師傅として招聘せられ、佛國の旅に赴くが爲めに一千七百六十四年二月十四日同大學に辭表を提出し、同年三月一日同大學評議員會によりて聽許せられたり。是れ實に「國富論」出版の前十二年なりしなり。

一千七百六十四年より同六十六年に亙れる佛國滯在は Smith の生涯の上に重要なる意義を有するものにして、吾人は Smith の上に與へたる François Quesnay 及び其の學徒の影響を看出さざるを得ず。殊に彼れの講義筆記と「國富論」とを比較對照する時は、兩者の間に存する學說の相違にしてフィジオクラアトの感化に由れるものを發見するを難しとせず。Smith は Quesnay を以て全世界に於ける經濟學研究者の頭首と思惟し、此の經濟學者にして「國富論」出版の當時まで生存したらんには、Smith は之れを彼れに献本す可き筈なりしと傳へらる。

Smith が「國富論」第一編第八章に於て勞働の賃銀を論じ、第九章に於て資本の利潤を論じ、殊に第十章に於て勞働及び資本の種々なる用途に於ける利潤を論じたる大本の思想及び其の中に掲げられたる例證の多數は貨物の價格を論じたる「講義」第二部第二分第七項中に包含せらるゝも、「國富論」に至りて明かに認めらるゝに至りたる分配論の結構は未だ之れを「講義」中に認むることを得ず。「國富論第二編「ストックの本質、蓄積及び使用」の主要部分も亦た「講義」中に於ては全然說明せらるゝことなし。「講義」に於ては資本に關して何等叙說せらるゝことなく、ストックも亦た重要なる地位を與へらるゝことなし。而して「國富論」中に於て重要なる地位を占むるに至り、其の第二編の多くを割きて論ぜられつゝある生產的及び不生產的勞働の區別の如きも未だ擧示せらるゝことなし。Quesnay の Tableau Oeconomique. が初めて世に現れたるは著者が六十四才なりし一千七百五十八年十二月のこと

なりき。此の四つ折判一面に印刷せられ、雁木線の纏結を有する有名なる經濟表も現代の眼には洵に Edwin Cannan の言の如く、小兒の玩具に類するの觀あるを免れず。然も「經濟表」は一ヶ年間に於ける產業の全收益を包括的に示さんとせるの點に於て、經濟學說上に顯著なる發達を齎せるものなり。而して吾人は Adam Smith の銳利なる眼光が直ちに其の主要觀念を把捉して、之れを其の「講義」に現れたる舊來の所說に適用せるの事實を想像するを得るなり。彼れは固より「經濟表」を其の儘に承認せんとはせざりしも、而も其の著者の著眼點を採用せり。斯くて勞働が投費の特殊の種類によりて發動せしめられ、數個の大項目に分配せらるゝ總年收益を生ずるものなりと做す確固たる思想を胎すに至れるなり。這個生產的勞働を發動せしむる特種の投費は資本的ストックの使費と同一視せらる。此の資本の使費によつて發動せしめらるゝ總べての勞働は被交換財を產出するものなり。而して斯くの如き勞働の一切のみが惟り本然に生產的なりと主張せらるゝなり。這般の新學說は實に「國富論」第二編の主要部分を形成するものなり（Cannan, Introduction to "Lectures," op. cit., p. xxix; cf., Introduction to "Wealth of Nations," op. cit., pp. xxix-xxxiii.）。

十

而も世には Smith に與へたる佛國學者の影響を過大視せんとする傾向の存したることも亦た之を認めざるを得ず。Pierre Samuel du Pont de Nemours は曾つて「國富論」に就いて談つて曰く「此の部厚なる四折判兩卷に收められたる尊重す可きも、而も冗長なる著作中に在つて、眞理と看做す可き總べてのものは Anne Robert Jacques Turgot の Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses. 中に於て看出さる可く、Adam Smith によつて附加せられたる總べてのものは敢て誤謬とは稱せざるも、而も不正確なるものなり」。（G. Schelle, Du Pont de Nemours et l'école physiocratique, 1888, p. 159.）後年に至りて彼れは斯くの如き失言を行へることを悔ひ、彼れが十分に Smith の著を鑑識することを得ざりしは全く英語の知識の不足に基くことを告白せり。然も比較的近時に至るまで Smith の「國富論」が Turgot の「考察」に負ふ所頗る大なりと做すの論存せり。固より Turgot の思想は幾多の點に於て純然たるフィジオクラアトよりも寧ろ Adam Smith に接近せるものあるを觀る。然も二個の書

中に於て偶々同一の思想を發見し得たりとするも、直ちに其の一を以て他に負へるものと爲すは大早計なりと云はざるを得ず。Rogers は自己の刊行せる「國富論」の序文に於て、特に其の第一卷に於ては、殆んど Turgot の區分及び所論より騰寫せるに過ぎざる諸章句を看出し得可しと爲し（ibid., 2nd ed., 1880, p. xxiii.）、而して單に前卷の註釋のみに於ても Turgot を引用すること七回に及べり。（ibid., vol. I., pp. 1, 14, 24, 31, 58, 71, 151-2; Turgot, Réflexion, §§ 90, 3, 39, 32, 67, 6, 10.）。然しながら其の中第十四頁に掲げたるものゝみは幾分彼れが Turgot より引用せる章句に類似せる所なきに非ざるも、然も是れとても、前掲「講義」中に現れたるものゝ反復に過ぎざるのみならず、Turgot の章句よりも寧ろ John Locke, Mandeville 及び Harris 等の如き英國學者の所言と類似せるものなり。而して他の六つの場合は本文と引用句との間に何等の類似も存せざるものなり。（Cannan, Introduction to "Lectures," op. cit., p. xxxiv.）。

Lujo Brentano は其の Die Arbeitsverhältnis gemäss dem heutigen Recht, 1877. に於て Smith とアンシクロペディスト（一千七百五十一年を以て着手せられ、同七十一年に完成せる大百科全書 Grande Encyclopedie. の編纂に從事せる諸家）殊に De l'Esprit, 1758. の著者たる Claude Adrien Helvetius 及びフィジオクラアトとの關係を過重視し、Smith が一千七百五十九年、即ち其の佛國旅行前に公にせる「道德的情操論」中に述ぶる所に據れば、彼れは明かに德行を以て善く事情に通じたる公平無私なる傍觀者の賞讃を得るの行爲に過ぎずと做せるに反し、「國富論」に於ては全く之れと反對に人間の本性に關する Helvetius の著に現れたる意見に贊成し、自利心を以て人間行爲の唯一の動機なりと做せりと說き、而して Adam Smith の學說はフィジオクラアト學派の學說をして殆んど其の光輝を失はしめ、且つ種々なる點に於て之れと反對の所說を行へるものと看做さるゝも、而も其の根本的意見に於ては全然同一にして、彼れは特に佛國學者の抽象的說明に代へて、實際社會に對する最も熾烈なる研究の結果を其の著の到る處に挿入して、之れを確證せるが故に讀者をして往々其の源を佛國に發したるの事實を忘れ、英國の經濟狀態より直接に發生したる新學說なりと思惟するに至らしめたりと主張せり。（Ibidem, S. 60-63.）。

此の著出版の翌年を以て現れたる Dr. Witold von Skarzynski の Adam Smith als Moral-

philosoph und Schoepfer der Nationaloekonomie, 1878. は又た Smith が、「道德的情操論」初版出版の年たる一千七百五十九年と「國富論」初版の公にせられたる一千七百七十六年との間に於て行はれたる佛國旅行に由りて唯物論者と化し、前著中に說かれたる學說は後著中に於て變更せられたりと看做せり。曰く

「Smith は彼れが英國に止まれる間は Hutcheson 及び Hume の影響を受けたる唯心主義者りき。而も佛國に於て旺盛なりし唯物主義に接觸することと三ヶ年の後、彼れは唯物主義者として英國に歸れり。佛蘭西旅行前に著されたる「道德的情操論」（一七五九年）と彼れが佛國より歸朝せる後に於て起草せられたる「國富論」（一七七六年）との間に存する矛盾は這般の極めて單純なる方法によりて明瞭と爲る」

ゐ。（Ibidem, S. 183.）。

殆んど之れと同時に August Oncken は其の Adam Smith und Immanuel Kant, der Einklang und das Wechselverhältniss, ihrer Lehren über Sitte, Staat und Wirthschaft, 1877. に於て之れに反對の意見を表明し、Buckle の意見を敷衍して、是れ等 Smith の兩著は一體系の一部を構成するものにして相對立せる兩實在に非ざることを立證せんと試みたり。彼れは、Smith 死去の年を以て現れ、是れ等兩著間に於ける關係を强調せる「道德的情操論」第六版の序文中に與へられたる說明を以て其の根據と爲し、彼れの倫理哲學の構圖を描かんとを努めたり。彼れは是れを以て他の哲學者が其の體系を建設せる方法、殊に Kant の其れと比較して、同樣なる思想の開展は他處に於ても亦た看出され得可きが故に、決して Smith の意見に劇變を生じたりと做すの推定に隱るゝの要なきことを示すに努力せり。彼れは更らに進んで Smith を以て極端なる唯物主義を唱道せりと做す獨逸歷史派の耆宿 Bruno Hildebrand 以來の非難に對して Smith を辯護するに苦心せり。一切の偏見を去つて Smith を研究せんか、彼れが唯心主義の哲學者たる Kant の先驅者たりしことを立證する幾多の章句を發見するなる可し。斯くの如きは特に其の「良心の學說」に適用せらるゝなり。Oncken と同一の思想系統を辿るものに Albert Delatour の Adam Smith, sa vie, ses travoux, ses doctrines, 1886. あり。而して Adam Smith の兩主著が矛盾するものに非ずと做すの意見に贊する者には Richard Zeyss の Adam Smith und der Eigennutz; Ein Untersuchung über die Philosophischen Glunglagen der älteren Nationalökonomie, 1889. Wilhelm Paszkowski, Adam Smith als Moralphilosoph, 1890. Wilhelm Hasbach, Untersuchungen über Adam

Smith und die Entwicklung der Politischen Ökonomie, 1891. 等を算ふ可し、

十一

「國富論」は佛國旅行中 Toulouse に於て起稿せられたるものなり。彼れが一千七百六十四年七月五日同地より Hume に宛てたる書中に於て「余は消閑の爲めに一書を草し初めたり」と云へるものは即ち是れなり。(Hume Correspondene, R. S. E. Library.)。而して「國富論」は實に彼れが母を扶けて鄉里 Kirkcaldy に退隱しつゝありし十年間の產物なりき。今に傳はる一千七百六十七年六月七日附 Hume 宛の斷簡に曰く「此の地に於ける余の業務は研究にして、余は過去約一ヶ月間之れに沒頭せり。余の慰安は濱邊傳ひの長き孤獨の逍遙なり。君は余が如何に消光しつゝあるやを推知し得可し。而も余自身は極めて樂しく、心地よく且つ安らかなるを覺ゆるなり。余の全生涯に在りて是れよりも樂しく、心地よく、且つ安らかなりしことは存せざりしなる可し」云々と。(Hume MSS., R. S. E. Library.)。彼れは一千七百七十年に其の著の初稿を完成せるも、而も斷えず之れを擴大し改訂して更らに六ヶ年を費せり。Thorold Rogers が一千八百八十五年二月二十八日の Academy に公にせる William Pulteney 宛一千七百七十二年九月五日の書翰は其の終に於て彼れの著は其の冬の初めに於て既に印刷に附せらる可き筈なりしも、「娛樂の缺乏と一事に就きて思索すること餘りに大なりしが爲めに生じたる不健康」其の他の障害の爲めに、更らに數ヶ月其の出版を遷延するの已むなきに至れることを記しつゝあるなり。一千七百七十三年春、彼れは其の草稿に最後の補正を行ひて之れを出版者の手に委するを得可しと思惟したるものと思しく、之れを携へて倫敦に向へり。其の精勵勞苦の爲めに著しく心身を害したる彼れは其の出版前四月十六日附を以て Hume に書を送りて彼れを其の遺著管理人たらしめたり。(Hume MSS., R. S. E. Library)。Adam Ferguson は同じき年を以て出版せられたる其の History of Civil Society. の第四版の脚註に於て「是れまで總べての科學の凡ゆる問題に關して現れたる所のものに匹敵す可き國民經濟の理論が「道德的情操論」の著者なる Smith 氏によりて」社會に供給せらるゝの日は恐らく近きにある可し」と稱せり。然も著者が倫敦に於て行へる調査は最初期待せるよりも遙かに重要なるものありて、其の稿本に對して多大なる訂正增補を行ふの必要を生ぜしめたり。(John Rae,

Life of Adam Smith, 1895, p. 264.)。

一千七百七十五年の初めに至り俄然其の身體の衰弱を來したる彼れの親友Humeは焦燥の極一千七百七十六年二月八日Edinburghより書を寄せて曰く「余は筆無精なるに於て君に讓らずと雖も、余が君の爲めに憂ふるの念は余を驅つて筆を執らしむ。君の著は既に久しき以前に於て印刷に付せられたりと傳へらるゝも、而も未だ廣告せらるゝまで待つことせば、君は久しく待つことゝ爲る可し」と。（J. Hill Burton, Life and Correspondence of David Hume, 1846, vol. ii, p. 483.)。

十二

「國富論」が漸くにして出版せられたるは一千七百七十六年三月九日のことなり。此の書は定價一磅十六志を以て四折判兩卷として市場に現れたり。出版者はW. Strahan及びC. Cadellなり。彼れは自らAdam Smith, LL. D. and F. R. S. Formerly Professor of Moral Philosophy in the University of Glasgow.と署せり。Smithは本書の初版に對して五百磅を受理せるものと認めらる。彼れは一千七百七十八年初めに若干の訂正を加へて第二版を出版し、一千七百八十四年末著しき增訂を加へて、八折判よりなる第三版三卷を出版し、次いで一千七百八十六年第三版と同一の體裁を以て第四版を上梓し、最後に一千七百八十九年、第四版と略ぼ同樣なる第五版を出版し、其の翌一千七百九十年七月十七日を以て長逝せり。

初めて此の書の出版せられたる際に王立協會の總裁Sir John Pringle（曾つて蘇國某大學に於て倫理哲學の講師たりし人）はJames Boswellに向ひて未だ曾つて貿易に從事したることなきSmith博士の該問題に關する論述によりて、法律家の醫學に對する以上に何物をも期待し得ざる旨を說けり。而してBoswellが此の言をSamuel Johnsonに傳へたる時、彼れは言下に之れを排して曰く「君よ、彼れは誤てり。曾つて貿易に從事したることなき人と雖も正さに貿易に關して立派なる著作を行ふを得可し。而して何物と雖も貿易以上に哲學によりて解明せらるゝことを要するものなし。單純なる富、即ち貨幣に關しては一國民若しくは一個人は他をして貧の程度を增加せしむることなくして其の蓄積を增加し得ざること明かなり。而も貿易はより價値大なるもの、即ち相異れる國家の特殊の利益の互惠を齎

すなり。商人は自己の特殊の貿易以外のものを思惟すること稀れなり。是れに關して良書を著はさんとする者は廣汎なる見解を有せざる可らず。一問題に就きて好著を草するが爲めには前以て實行することを必要とせざるなり」と。（Rae, op. cit. p. 288.）。

而して彼れの大著「國富論」の出現は直ちに其の諸先輩の踏査的努力を隱蔽するに至れり。經濟學界の諸遊星は次第に此の太陽に向つて引かれ行けり。佛國に於てさへ Économistes なる文字は最早フィジオクラアトのみを指すことなきに至れり。同學派の發生と興隆と末運とを具さに睹たる前記 Dupont が其の晩年に至り Smith 學徒たる Jean Baptiste Say に宛てゝ「我が親愛なる Say よ。君も亦た我れ等と等しく經濟學者なり」と云へる言には一種の哀音の伴へるを覺ゆるなり。今日に在つてはフィジオクラアトの學說は歷史的好奇心を刺激する以上に多くの效果なきものなるも、之れに反して Smith の大著は今に至るまで、相次げる各時代の經濟學者に對する嚮導者にして亦た洽く其の出發點を供するものたるなり。若し「不滅」と稱せられ得可き經濟書ありとせば「國富論」は先づ第一に斯くの如き稱號を要求し得可きものなる可し。

氣賀勘重博士を中心とせる邦譯「國富論」將さに稿成りて今や其の出版の日近からんとす。而して吾人は今、之れに附す可き題言を草するの必要に迫られたるも、L. L. Price の所言の如く、Adam Smith に關して新奇なる或るものを云はんとするは決して容易の業に非ず。而も未だ曾つて言說せられたることなき重要若しくは有益なる或るものを云はんとするに至つては殆んど不可能事に屬す。（Adam Smith and his Relations to Recent Economics, read before Sect. F of the British Association at Edinburgh, 12, Aug. 1892.）。吾人は唯だ泰西諸學者の貴重なる研究の要を補綴して爰に題言一篇を草し、先づ其の一部を本誌に提げて、同學諸君の批評を乞ひ、幸に大過なきを期せんとす。尙ほ吾人は本稿を草するに當り、其の結構上曾つて本誌其の他に揭げたる拙稿諸篇より任意拔錄せる所少なかず、敢て讀者諸君の諒承を請はざるを得ざる所なり。